Oral Session | Proctology

Fri. Nov 20, 2026 10:00 AM - 11:10 AM JST | Fri. Nov 20, 2026 1:00 AM - 2:10 AM UTC | Room 12 (1F 109)

Oral Session 12 Other Colorectal and Anorectal Diseases 1

座長：古川 聡美（JCHO東京山手メディカルセンター大腸肛門病センター）

[O12-1] The role of proctology in community healthcare: real-world bowel clinic practice based on stool diary and anorectal function assessment

*Emi Akizuki[1] (1. Sapporo Ishiyama Hospital)

【背景】
便秘、便失禁、排便困難、LARSなどの排便障害は多様な病態を背景に長期管理を要するが、地域医療において体系的な評価および管理体制は十分に確立されていない。特に術後排便障害や症状が複雑な症例では、排便パターンに加え肛門機能を含めた評価と段階的介入が求められる。
【目的】
肛門専門施設における排便外来の実臨床データを解析し、排便障害診療の実態およびその役割を検討する。
【方法】
2026年3–4月に当院排便外来で排便日誌を導入し管理を行った連続46例を対象とした。主症状、流入経路、生活への支障、QOL（EQ-5D-5L）および症状スコア（CSS、CCFIS、LARSスコア）を解析した。排便日誌は排便パターンの把握が困難、または問診のみでは評価不十分と判断した症例に導入し、排便パターンおよび肛門機能を踏まえて生活指導、薬物療法、バイオフィードバック療法などの段階的介入を実施した。
【結果】
主症状は便失禁47%、便秘35%、排便困難17%、LARS17%、におい漏れ3%であった。流入経路は他院通院中の自己判断受診35%、当院既存患者35%、他院紹介15%などであり、紹介より自己受診が多かった。生活への支障は中等度46%、強い48%と高頻度に認めた。初診時QOL中央値（IQR）は0.80（0.70–0.90）、CSS 13（10–14）、CCFIS 12（9–15）、LARSスコア39（37–41）であった。BF療法導入は6例（17%）であった。抄録作成時点で1か月後評価が可能であった19例では、QOL0.05以上の改善は5例（26%）に認め、CSS 10（7.25–13.5）、CCFIS 11（5–12）、LARSスコア32.5（28.5–34.25）と改善傾向を示した。
【結語】
排便外来には生活支障の強い排便障害患者が集積し、その多くは自己判断による受診であった。これは地域医療における排便障害診療へのアクセス不足を示唆する。排便日誌と症状スコアに加え、肛門機能を踏まえた評価と段階的介入により、排便障害の可視化と治療方針の最適化が可能となる。肛門専門施設は、腸管症状のみならず肛門機能を含めた総合的評価に基づく診療を担う点で、地域医療における重要な役割を有する。

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会